

審査報告の要旨

論文提出者氏名 権 静

本論文は、その論題が示すとおり、古代日本・朝鮮における文字世界の形成について、東アジア世界における漢字の受容と内部化という視点から論じたものである。

圧倒的に強大な中国との関係のなかで、みずからの文化と国家を形成するという古代東アジア世界の問題を、日本と朝鮮とは共有していた。文化の根幹というべき文字についていえば、日本も、朝鮮も、みずからの言語において文字を生むことなく、中国から漢字を受け入れることによって文字を得たのであった。本論文は、それがどのように果たされてゆくかを、朝鮮と日本とをあわせて考察しようとする。

日本においても、韓国においても、自分たちの歴史にかかわる重要な問題として、文字世界の形成に関する多くの研究が積み上げられてきた。さらに、韓国・日本における木簡の発見など、近年、文字資料の状況は大きく変わり、新しい問題認識がもとめられている。そのなかで、日本・朝鮮をあわせて見るということが必須不可欠の課題であることも明確になってきたのである。そのことは従来も欠けていたところであるが、現在の状況にあつて、とくに切望されるものとなっている。ただ、それは、日韓双方の資料と研究とに対する目配りが必要であり、容易な課題ではない。本論文は、それに対して果敢に挑戦したものであり、古代日本および朝鮮の文字世界の形成について全体的な展望を与えようとしたものである。

本論文は、第一章「問題設定——古代日本と朝鮮半島における文字の始まり」、第二章「文字資料の現状と整理」、第三章「古代日本と朝鮮における文字——「外部の文字」・「内部化した文字」・「内在化した文字」を通じて——」、第四章「結論、及び以後の課題」の四章によって構成される。第一章において研究史をふりかえって問題の所在を確認し、第二章で資料について整理することを経て、第三章を本論とし、第四章でまとめを与えるという構成である。

注目されるのは、日本における研究の到達水準を十分に学んだことによって、韓国の研究の現在に対する明確な批判を育てるなかで、本論文が成されたということである。方法的問題として第一章で述べられるところであるが、韓国の国文学の研究は、もっぱら漢字は朝鮮の言葉を表記するために取り入れられたものという観点から論議してきており、歴史学は、資料から当時の事実を読みとることに重点を置いてきたのであった。本論文は、それを批判し、文字資料の包括的整理のうえに、中国との関係における文字の始まりの間

題をとらえることから出発して、資料に即して歴史的に見渡すべきことを主張する。そして、資料的にはより豊かな日本において明らかにされてきた観点を、古代朝鮮に対する把握として生かそうというのである。

それが、第三章において、「外部の文字」・「内部化した文字」・「内在化した文字」という把握のしかたとして具体化される。「外部の文字」とは、文字が社会内部で用いられるのではなく、外部、つまり中国との関係において用いられることから始まったということである。自然発生的な文字使用というのではなく、政治的な問題として始まった文字ということ、日本・朝鮮に共通する東アジア世界の問題としてとらえるべきだということである。そこから、文字が内部で用いられるようになり（「内部化した文字」）、自分たちの言葉のなかには入りこんで用いられるにいたる（「内在化した文字」）という展開が、古代日本・朝鮮における共通の文字の歴史として見渡される。

その叙述は、一々の資料に即してなされてゆくのであり、説得的であるが、とりわけ古代朝鮮の文字資料が、最近発見された木簡まで含めて包括的に取り上げられたことは、意欲的な、従来にはなかった試みとして特記されよう。

本論文が評価される点は、なにより、古代朝鮮の文字資料を包括的に取り上げ——そのための資料批判的手続きが第二章において成されているが、その実証的努力は多大なものがある点も評価したい——、日本とあわせ見て東アジア世界における共通の問題として日本・朝鮮をとらえることによって、全体的な把握の方向を与えたということにある。古代日本の文字の位置づけが韓国の資料を視野に入れることとともに果たされるべきだという、正当な研究の方向性を具体化したものとして、本論文の試みの意義が評価されるとともに、特に高く評価されるのは、韓国側の研究を批判的にとらえ直していったことである。「外部の文字」・「内部化した文字」・「内在化した文字」という把握は、従来の韓国の研究になかった新しい視点であり、日本で学んだことを生かしたものである。比較的研究が結実した成果ということができる。本論文のこの提起は、韓国の国文学研究にとっても、新鮮で刺激的なものと受け止められるであろう。本論文が開いた見地を、より充足し、発展させて、韓国の研究とあいわたることが期待される。

ただ、その「外部の文字」・「内部化した文字」・「内在化した文字」という基本概念について、十分成熟したものとなっていない憾みがあること、審査委員の指摘があった。朝鮮側の資料に対する、新たな把握の提起であるだけに、より明確にして説得性を高めることがもとめられるであろう。そのためには、古典漢文にかんする学力の増進も望まれる。しかし、そうした欠点は、今後の研鑽によって補われうるものであり、本論文の価値を損なうものではないということが審査委員の一致した評価であった。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。